
フォーカード？ いや、革命だ！

妖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フォーカード？ いや、革命だ！

【Nコード】

N2014Y

【作者名】

妖

【あらすじ】

人間界、魔界、天界……この三界で成り立つ世界

この物語は魔界の家庭教師？が引っかき回したり、引っかき回されたりするお話です

これは更新したとしても順調に行けるかどうかもわからない大分チャレンジ要素の多い作品となっております

そんなんですが時間があるときにでも、ちょっとのぞいていただけたら嬉しいです

オープニング

豪華な調度品、大きなベッド、どこか禍々しい雰囲気。

外は暗く、遠くからは何かの叫び声が聞こえる。

そう、ここは魔界。

争いが絶えず、凶悪な悪魔が跋扈する闇の世界。

そんな物騒な場所で話は始まる。

「あゝあ……つまんねえなあ」

「いやいや！」

お前ボクの家庭教師だろ！？

つまんないとかじゃないだろ！」

「……なあエミール、なんかおもしろえことないか？」

「ボクの話聞いてた!？」

「オオ！ そう言えばアイツ地獄にいるんだったな……ち

よつくら行ってみるか！」

「だから聞け……!!!!」

我が道に行くマイペースな男を止めようとするフードを被った男の子。

彼らは一体何者なのだろうか……それはまだ謎に包まれている。

少年が腰の辺りに飛びつくと、男は立ち止まり振り向く。

「わかってるって……（お前のオヤジにも頼まれてるしな）」

「ホントか!？」

「つていうか父上も、なんでお前みたいな不真面目なやつを家庭教師につけたんだ？」

「そりゃあ、俺が優秀だからだろ？」

「はいはい……でお前父上と何処で知り合っただ？」

「信じてねえな、まあいいけど。」

「ハゴスと出会った場所か？」

「あゝ……何処だったかねえ」

「だから父上の名前を呼び捨てにするなって！」

「父上は魔界大統領だぞ！」

「その気になればお前なんか小指一本で殺せるんだから気をつけるよ！」

「ああそうだったな、小指一本……ねえ」

男は少年に見えないように小さく笑う。

その顔はまさに獰猛な野獣の様な笑みだった。

どうやら男は少年に隠していることがあるようだ。

少年が気付く前に獰猛な笑みを引っ込めると、代わりに胡散臭い笑みを浮かべる。

「そう言えばお前はボクよりも長生きしてるんだから、二つ名の一つでもあるんじゃないのか？」

「二つ名……なくはねえけど、餓鬼には教えれねえなあ」

「またボクをバカにして……ハア」

「お前はまだまだ子供さ、だがまあ……今日の模擬戦で良い成績を残せたらお前の質問に一つだけ答えてやるよ」

「ホントか!？」

「ああ、本当だ。」

悪魔はウソはついてても、約束は破らないもんだ」
「絶対だからな！」

そう言い残すとエミーゼルは部屋から走って出て行った。
その後ろ姿を苦笑しながら見送る男。

「まったく……ハゴスには微塵も似てねえなあ」

「余計なお世話だ」

「うお！？」

いきなり後ろに出てくんなよ！」

「フン、お前が隙だらけなのが悪いのだろう？」

「真後ろに転移されて気付ってのは、なかなか無茶言ってくれりぜ」

男の後ろに音もなく現れたのは、エミーゼルの父で魔界の大統領ハゴス。

その本当の姿を見た者は魂すら残さず消滅するとまで言われている男だ。

そんな人物に家庭教師の男は親しげに話しかける。

「で、まだ動かねえのか？」

もし暴れるってんなら手を貸してやってもいいぜ？」

「……それはできません。」

だからこそお前に下げたくもない頭を下げたのだ」

「はあ……つまんねえ。」

昔のお前だったら、もっとハツチャケてただろうに」

「お前には、まだわからん（自身の身よりも優先すべき者がいない

お前にはな)」

「わかってるとは思うが、来年までだぞ？」

「そう言う約束だからな……」

「ああ、それで借しは帳消しだ。」

頼むぞ、アグニス」

そう言い残すとハゴスは転移の術式で執務室へと移動した。
残された男は小さくため息をつく。

「ここではアグニって呼べよな、何のための偽名だったの。
それにしても、はぁ……つまんねえなあ。」

とりあえずあの餓鬼ほつといたらうつせえし、様子でも見に行くかね！」

男はポケットに手をつ込み部屋を出て行った。

今は昔、人は闇を恐れていた。

闇を恐れ生きることでは人は慎ましく生きることができていたのだ。
しかし……人間の科学力が進化することで、徐々に闇を恐
れることがなくなってきた。

これはそんな人間たちを戒めるものたちの物語である……
かもしれない。

「くつそ〜、あの時アグニが声をかけてこなければ勝てたのに！」
「そんな簡単に注意を逸らすお前が悪いんだろ？」

話しながら廊下を歩いているのは、所々に小さな傷を負ったエミールとどこか楽しそうなアグニである。
どうやら訓練は惜しいところで失敗したようだ。

「というわけでお前の質問には答えないからな」
「少しぐらい、いいじゃないか！」
「約束は約束だからな」
「ちえっ」

不満はあるが、これまで短くない時間を共に過ごしてきて彼が折れないことを知っているエミールは諦めることにした。
その子供っぽい反応に苦笑しながらアグニは軽く頭を撫でる。

「まあ、惜しいところまで行ったんだ。
次はイけるだろうよ」

「……当たり前だろ！」
ボクは魔界大統領の父上を持つ死神、エミールだぞ！」
「そうだな……。」

まあ俺はお前自身を評価してるんだがな」

「同じ意味じゃないのか？」

「いつかわかるさ……（こづいづいは自分で気付くもんだしな）」

不思議そうに首を傾げる少年の頭をさつきよりも強めに撫でると、突然立ち止まった。

そしてアグニは前方の柱を睨みつける。

「オイ、そこにいるヤツ出てこい」

「……貴様に気付かれるとはな」

そう言つて柱の陰から現れたのはハゴスの側近兼秘書をしている魔界三豪傑の一角、雷帝サイロスだった。

その顔はどこかアグニを侮蔑している様だ。

しかしそんなことを微塵も気にせず、気配を殺して待っていた理由を尋ねる。

「お褒めにあずかり、恐悦至極……で、なんの用だ？」

「チツ、生意気な。」

貴様の様な何処の馬の骨とも知れぬ輩にご子息を預けるとは、あの方は何を考えておるのだ？」

エミーゼルを見て、ため息をつくサイロス。

その溜息にエミーゼルは下を向き、小さく肩を震わせる。

アグニはそれを見て小さく舌打ちすると、少しだけ前に出てサイロ

スの視線を遮った。
するとサイロスは視線をアグニの顔に移し、鼻で笑う。

「用があるなら、早く言え。」

俺は早く部屋に戻りたいんだよ」

「ああ、そうだったな。」

「……………大統領閣下がお呼びだ。」

直ちに執務室へと来るように」

「わかった……………それだけか？」

「本当に生意気なやつめ……………あんまり調子に乗らないことだ。」

お前なんぞ、私にかかれば一瞬で消し炭に出来るのだからな」

「はいはい、わかったわかった。」

魔界三豪傑様は忙しいんじゃないのか？

俺なんかに構ってないでさっさと行ったらどうだ」

「チツ！」

自分の脅しに微塵も恐怖を感じていないアグニに苛立ちを感じつつも、サイロスはその場を去っていった。

消えてからもしばらくサイロスの去っていった方向を見ていたアグニだったが、ふと自分の服の裾を掴んで震えている存在に気付く。

「……………どうした？」

「なんでアグニはサイロスが怖くないんだ？」

いや、サイロスだけじゃない。

お前が戦つてるところはあんまり見たこと無いけど、強さは精々中級悪魔くらいだろ？」

なんで自分よりも強い相手にあんな風に接することが出来るんだ？」

「なんでって言われてもなあ………なんとなくだな」

「なんとなく!?!」

「まああえて言うなら、俺はハゴスに頼まれて来てるわけだから、ハゴスの部下であるアイツらは手を出してこないだろうからな」

「それでも、もし隠れて手を出して来たらどうするんだよ！

お前死んじゃうんだぞ!!」

「そんな時はそんな時ってこゝろそんなの嫌だ!」………大丈夫だつて、俺はお前が思ってるほど弱くないんだぜ？」

顔を歪め、目に涙を溜めて叫ぶエミールに少し驚いたアグニだったが、その場にしゃがみ込んでエミールに視線を合わせる。

「それに俺だつて死ぬ気は無い。

目的もあるしな………だからあんまり心配するな」

「し、心配なんてしてない!!」

た、ただお前がいなくなったら家庭教師が居なくなつて困るから………」

「ああ、わかつてるって」

目元を袖で拭いながらそっぽを向くエミールを苦笑しながら見つめる。

そしてスツと立ち上がりエミールに背を向けた。

「もう大丈夫だな………さてつと、じゃあ行くとするかね」

「何処に行くんだ？」

「どうやらハゴスが俺に用があるみたいだからな」

「あ」

「忘れてたのか……まあいけどな。」

お前は部屋に戻って、今日の訓練の反省点を纏めとくように。

特に最後の魔法の撃ち合いのことな」

「わかった」

「よし、じゃあな」

アグニはエミールに背を向け、廊下の曲がり角へと消えていった。その背中に向けて小さく呟いた「ありがとう」という言葉はアグニに届くことはなかったが、その気持ちは伝わっていたことだろう。

第1話（前書き）

一人お気に入り登録していただいたので、二話目も上げます

第1話

執務室の前に着いたアグニは、ノックもせずいきなりドアを開ける。

すると中には豪華なイスに座った魔界大統領ハゴスの姿があった。

「来たぞハゴス、何の用なんだ？」

「……ノックぐらいしろ。」

もし我以外に誰か居たらどうするつもりだ」

「お前以外の気配感じなかったし、実際居なかったんだからいいだろう？」

「はぁ……もういい」

ため息をつき、首を小さく横に振るハゴスだったが、やはりアグニはまったく気にしてない。

それどころか何故か胸を張っている位である。

気にしていたら話が進まないと思ったハゴスは、早速用件の説明に入ることにした。

「お前を呼んだのは他でもない……地獄を知っているな？」

「ああ、そりゃあな」

「では地獄に『暴君』が居ることはどうだ？」

「一応は知ってる。」

そういえばアイツ地獄でなにやってんだ？」

アグニの質問にハゴスは顔を顰める。

何故そんな顔をするのかわからない彼は首を傾げるが、ハゴスの次の言葉にその顔は驚愕に染まる。

ちなみにここで言う『暴君』は、ある悪魔の二つ名である。

「……係だ」

「何だつて？」

「プリニー教育係だ」

「ふーん……つて、はあ!？」

ここでデイスガイアを知らない人に説明をしておく、プリニーとは生前に罪を犯した人間の魂をペンギンのぬいぐるみのような物に詰め、その罪を誰かに尽くすことで償うという存在である。

投げられると爆発することから、爆弾の様に使用される場合もあるので非常に過酷な償いと言えなくもない。

追記するとプリニーには心得が存在し、一番最初の心得は語尾に「ツス」を付けると言うものである。

「なんでまたそんな仕事してんだ？」

「理由は知らんが、魔力を失っていることと関係があるのではないか？」

「アイツまだ血吸ってないのか!？」

「何百年経ったと思っただよ……」

「あやつの約束に対するこだわりは、凄まじい」

二人は昔の暴君を思い起こし、懐かしんだ。

決して心温まる思い出など無いが全力で戦っていたときは、まるで恋人との逢瀬のように心躍ったものである。
しかしアグニはここに昔の知り合いの話をしに来たわけではない。

「で、アイツがどうしたんだ？」

「結論から言うと、地獄で暴れ始めたようだ」

「ほう！ そりゃ面白い事になってるな！！」

「面白がっている場合ではないぞ」

「俺にはあんま関係ねえしなあ」

「いや、関係はある」

「は？」

アグニは現大統領府に隷属しているわけではない。

故に暴君が政府転覆を企もうがあまり関係ないのだが、ハゴスが言うにはどうやら関係があるようだ。

その理由を聞くために耳を澄ますアグニ。

「先ほど反逆を止めようと地獄へ刺客を放ったのだが、撃退されたようなのだ」

「腐っても『暴君』だな。」

吸血鬼の頂点は伊達じゃないってことか」

「茶化すな。」

「……………そこで援軍を送ることにしたのだ」
「誰を送るんだ？」

その言葉を受けて、ハゴスの表情が歪む。

まるで自分の身が切られる苦痛を感じているように。

「なんだよ？」

「アバドンだ」

「特殺任務部隊か……っつて、おい！

あの部隊のトップは！？」

「そつだ、我が息子……エミーゼルだ」

特殺任務部隊『アバドン』とは、その昔魔界が荒れていたときに猛威を示した部隊である。だが現在は名前は物騒だが今まで実戦経験も殆どなかったお飾り部隊であり、構成メンバーも若く余力のない悪魔で構成されている。

そんな部隊の隊長を、何故大統領の息子が務めているのかは……
……いずれ語るときが来るだろう。

15

「アイツをまだ実戦に出すのは早いぞ！

その任務は魂を狩ったことのない死神にとって、荷が重すぎるだろうが！」

「それは分かっているつもりだ。

しかし反逆者の処理は特殺任務部隊の仕事だ」

「……どうしても行かせるのか？

下手するとあの餓鬼死ぬぞ」

「大統領として特例扱いは出来ん」

組織のトップは常に冷静且つ客観的な視点を持たなければならない。
例えそれが自分の息子の危機に繋がるうとも……。

「話は分かった。
だが俺を呼んだ理由が分からねえ。
お前は俺に何をさせたいんだ？」

そう聞くとハゴスはイスから立ち上がってアグニに向かって歩き始め、アグニのおおよそ2メートル手前で立ち止まった。
その目には強い意志が宿っている。

「頼む……息子に付いてやってくれ。
自由に動けるのは貴様だけなのだ。」

部下を使えば公私混同と言われ、内部で反乱が起こるかも知れん」

「貴様は今の魔界の現状を知っているだろう。
地獄では現政府に不満を持っている者も多い。
……それに『彼奴』のこともある。
だから頼む」

そう言つて深々と頭を下げる姿は、魔界大統領ハゴスではなく、一人の父親の姿だった。
アグニはその姿を見て、一端何かを考えるように目を瞑る。
そしてゆっくりと目を開けた。

「俺もアイツほどじゃないが、交わした約束は守る。
俺がお前と交わした約束は、過去の借りを帳消しにする代わりに息

子の面倒を見ること。

「……………エミーゼルの近くに居ないと面倒を見れないだろう？」

「……………すまんなアグニス」

「……………俺は約束を守るだけだ」

こうしてアグニの地獄行きが決まった。

ちなみにアグニは地獄へ行ったことがなく、地獄に何かあるのかと顔には出さないが若干楽しみにしている。

地獄のことを考えていると、ふと一つの疑問が思い浮かぶ。

「そういえばアイツは、なんで反逆始めたんだ？」

「今プリニーの数が増えすぎているのは知っているな？」

「まあ一応な」

「故にプリニーを出荷せずにある程度処分する事にしたのだが、その処分するプリニーがアヤツの教育していたプリニーだったららしいのだ。

アヤツはそのプリニーどもに、出荷する前にイワシを馳走する約束をしていたらしい。

その約束を守るためだと聞いている」

「……………変わらないなあアイツ」

「そうだな」

「だが何故イワシなんだ？」

「……………知らん」

これから戦うかも知れない相手のことを思い出しながら、何故か少し和んだ二人だった。

果たして地獄には何が待ち構えているのか？

そして『暴君』とは一体どんな悪魔なのか？
全ては地獄で明らかになる。

第1話（後書き）

エミーゼルマジ天使w

……まあ俺が一番育てたのはデスコなわけだけでも！

今なら結構安い値段でディスガイア4は買えるので興味がある方は是非

ちなみに後日談やアペンドディスクの敵は結構レベルが高いので、もしやるかたはお気をつけを……レベル5000とかだよ？

いやまあ、後日談の最後に出てくる奴が一番鬼畜なわけだけでも一度した攻撃はダメージゼロで、こっちは相手の攻撃食らえばほぼ確実に死ぬという中々の鬼畜っぷり

装備整えて、装備品のレベル上げて、一気に落とすのが常套手段

第2話（前書き）

そろそろ資格試験の勉強を本格的にしなきゃならないな……趣味は
しばらくお預けかな？

第2話

執務室を後にしたアグニは、地獄に行くことを伝えるためにエミール部の部屋へと向かう。

長い廊下を歩いて部屋の前に着きドアを開けると、アグニに言われたとおりに机で今日の訓練の反省を書き出しているエミールの姿があった。

「おお、やってんな。

真面目だねえ」

「うおい！ お前がやれって言ったんだろ！」

振り返って怒鳴ってくるエミールだったが、アグニは微塵も気にしていないようだ。

むしろその反応を楽しんでいるかの如く笑顔である。

アグニは笑顔のまま机の上にあった反省点の書かれたレポートを手に取り、読み流す。

レポートには最後の相手を倒したと思って気を抜いていたら、生き残っていた相手に不意を突かれて負けたと書いてある。

まだまだ精神的な粗が目立つ内容だったので、若干眉をひそめたアグニだったが直ぐに表情を元に戻しレポートを机の上に戻す。

「そうだったか？」

「……………まあいいじゃねえか。

そんなことよりハゴスから伝言があるぞ？」

「父上から？」

エミーゼルとハゴスは最近直接会うことも殆どなく、そんな父親から突如伝言があると言われ疑問を感じたようだ（ちなみに言っておくと別に家族仲が悪いわけではなく、ただハゴスが忙し過ぎるだけである）。

アグニは地獄で反逆が起こったことと、その鎮圧にエミーゼル率いる特殺任務部隊アバドンの出勤が決まったことを話した。すると顔を青くしたエミーゼルがアグニに問いかける。

「ボ、ボクが!?!」

「そう、お前がだ。」

何か問題でもあるのか?」

「え、でも、だって……………」

「まあ決定事項らしいから断れないみたいだぞ?」

「そんな……………だってボクは……………」

まるでこの世の終わりのような顔を浮かべるエミーゼルに苦笑するアグニ。

無理もない。

地獄にいるのは弱体化されているとは言え、魔界有数の極悪人達。

まだまだ経験不足のエミーゼルが怖がるのもしょうがない。

とりあえずこのままではまともに会話も出来ないので、まずは落ち着かせることにした。

「まああんま怖がんな。」

「一応俺もついて行ってやるからよ」

「ほ、ホントか!？」

「うお!？ 本当だから落ち着け!」

俯いていたエミーゼルはバツと顔を上げ、アグニに掴みかかる。

流石に掴みかかってくるとは思わなかったアグニは、一瞬はじき飛ばそうとする自身を無理矢理押さえ込んだ。

ここで否定的な行動を取ると、またエミーゼルはネガティブモードに入ってしまうために、正直結構心拍数が上がったアグニだった。だが一つだけ忠告するために、アグニは顔を引き締める。

「ただし俺は極力戦闘に参加しないぞ？」

俺が狙われたら話は別だが」

「え？ なんで？」

「俺はアバドン所属じゃないしな。」

もし俺が戦闘に参加したら、出しゃばるなって言われちまうだろ？」

「………そっか、そうだったな」

少しだけガツカリしたようだが、最初に比べればマシな精神状況になったようだ。

知らない場所に一人で行くのは結構不安も大きいから、知り合いが一人でも多い方が気が楽なのだろう。

アバドンのメンバーは完全に上司と部下の関係な上、エミーゼルに従っている理由が魔界大統領の命令だからという理由なので、完全なビジネスライクな関係故に数には入れない。

エミーゼルは自身の頬を叩き、気合いを入れる。

「よしっ！」

待っているお、地獄の反逆者どもめ！

大統領の一人息子、死神エミーゼルが鎮圧してやるぞー！！」

「その調子だ！」

気持ちで負けてたら何もできねえからな（まあ今回はちょっと相手が悪いかも知れねえが、最悪コイツ連れて逃げりゃいいだけだしな）

「

アグニは最悪エミーゼルだけ生きていれば問題ないので、アバドンが全滅しようと思わない。

下手に手を広げすぎると、大事なものがこぼれ落ちてしまうかも知れないから………。

少し物思いにふけるアグニだったが、まだ任務開始日時を伝えていなかったことを思い出す。

「出発は明日の朝だ。

しつかり準備しておけよ？」

「わかった！」

明日はよろしく頼むぞー！」

覚悟が決まったエミーゼルの瞳にはこの任務を必ずこなしてみせると、決意の炎が燃えさかっている。

尊敬する父から頼まれた任務。

今まで目立った功績のないエミーゼルにとって、張り切らない理由はなかった。

ただ反逆しているのが誰か確認しなかったことが、彼にどんな結果をもたらすかはまだ誰にも分からない。

そしてアグニは聞かれない限り教えるつもりは無い様である。
コレも一つの教育と考えているのだろう。

「じゃあ、また明日な」

「うーん……………杖はアレで良いとして、ローブはどう
しようかな？」

いや……………でも……………」

もう明日の任務の事を考えているのか、アグニの挨拶すら聞こえない位思考に没頭しているエミール。

そんな余裕のないエミールを見て肩を竦めるアグニだったが、ふと自分の過去を思い出し苦笑いを隠せなかった。

誰かに褒められたい、誰かに認められたいという想いを抱いたことがないアグニにとって、エミールの気持ちは余り理解出来ないものだったが、昔は自分よりも強い相手と戦うときにこれくらい緊張してたなあと過去を振り返る。

そのまま部屋を出て自分の部屋へ向けて歩き始めるアグニ。

昔の事を思い出した彼は、ふと昔の仲間達に会いたいという気持ちが少しだけ湧いたようだ。

「明日もし加勢する事があるなら、久しぶりに誰か呼ぶか……………」

今のアイツがどの程度の力を持っているかわからねえし、備えあれば何とやらって言うしな」

廊下で呟いたその言葉には、どこか楽しそうな気持ちが込められて

いた。

彼の特殊能力は仲間の召喚。

魔物使いの突然変異種たる彼しか持ち得ぬ能力である。

その呼び出す相手によっては、明日の地獄は文字通りの地獄になるかも知れない。

「そうと決まれば誰を呼ぶか考えておかないとな!」

誰を呼ぶか考えているその姿は、遠足を楽しみにしている子供の様に純粹に見えた。

例えその結果が激しい戦いになるのだとしても……………。

第3話（前書き）

ゼロ魔……考え中

デイスガイア4……試行中

なににせよ12月にやらなきゃいけないことがあるから、あんま身が入ってない感じが……

第3話

魔界最下層の『地獄』と下級悪魔が住まう下層区の境目……
そこにはエミーゼル率いる特殺任務部隊アバドンと、付き添いで来
ているアグニの姿があった。
眼下に広がる頑強な砦のような刑務所『地獄』は、エミーゼルに大
きな緊張を与えていた。

「あ、アレが地獄……」

「大丈夫ですかエミーゼル様？」

「だ、大丈夫に決まっているだろ！」

オレ様を誰だと思ってる！！

大統領の一人息子、死神エミーゼルだぞ！？」

「そうでございました。」

これは入らぬお世話を……」

アバドンの副隊長でもある死告族に心配されつつも強がるエミーゼ
ルだったが、足は震え顔色も良いとは言えない。

そんなリーダーの姿に不安を隠せない隊員達。

ちなみにその時アグニは、少し離れたところで欠伸をしていた。

たまに向けられるエミーゼルからの視線にも気付かない振りをしな
がら……。

「ふああああ……眠っ」

「貴様もついてきたのなら気合いを入れる」

「そうだ、そうだ！」

戦闘も碌にしない悪魔が暇そうにするなんて生意気だぞ！」

「ああ、そいつぁ失礼。」

今後気を付ける……かもしれないわ」

ここでもアグニの扱いは余り良くないようだ。

その評価も当然なのかも知れない。

何故かというと、アグニは今の家庭教師という立場になってから戦闘を行ったことが殆どなかった。

それどころか殆ど大統領府内をうろちよろしているところか、昼寝しているところしか見られていなかったのだ。

もちろん彼の部屋などのプライベートの部分は知られていないが、よく見られる姿がだらけているところなのでコネで入ってきた残念な悪魔という印象が強いのである。

ちなみに数少ない戦闘と言うのは、エミーゼルに強請られて軽く模擬戦をやった位なのでアグニの正確な戦闘力を知っている者はここに存在しない。

「かの有名な『孤軍』に似た名を持ちながら………情けない
!!!

ちよつとは前に出て戦ったらどうだ！」

「そうだ、そうだ！ 戦ってみるお！」

「いやいや、俺戦い苦手だし。」

地獄の極悪人相手にしたら死ぬぞ？

(どうせコイツら戦ったら戦ったで文句言っただろうなあ………

・めんどくせえ)

「フン、腑抜けが！」

もういい、各自進行用意だ！」

「「「「了解！」「」「」

完全にアグニを視界の外に追いやり、地獄へ向けて歩を進め始めたアバドンの面々。

しかしその所為でアグニの咳きを聞き取ることが出来なかった。

『っていうか弱いもの虐めなんかしても面白くねえしな』という咳きを……。

そんな若干の衝突もありながら、ついに地獄へとたどり着いたアバドン+。

地獄の中は少し騒がしく、囚人たちはその口々に反逆者達について話している様だ。

エミーゼルは話を聞くために囚人たちの監獄へと近づいていく。

「オイ、反逆者について何か知っているか？」

「ア？ 何だこの餓鬼？」

餓鬼は家に帰ってクソして寝な」

「な！？ オレ様を誰だと思ってる！

オレ様は大統領の一人息子、死神エミーゼル様だぞ！」

「な、なんだと！？」

監獄内がにわかに騒がしくなる。

やはり大統領の息子という肩書きは大きな意味を持つようだ。

囚人たちは話し合いを始め、数分後に一体の悪魔が前に出てきた。どうやらこの囚人グループのリーダーのようだ。

「初めまして坊ちゃん。

で、何をお聞きになりたいんです？」

「今地獄を騒がせている反逆者についての話を聞かせろ」
「ふむ、わたくし達もそれほど多くの情報があるわけではありませんせんが、お教えいたしましょう」

どこか老成している猪人族の話を聞いてみると、どうやら反逆者はプリニー教育係の二人であり、地獄の獄長もその仲間らしいとのこと。

他にも幾つか情報はあったが、その殆どが伝える際に歪んでしまったであろう情報ばかり。

たとえば反逆者は身の丈10メートル以上だとか、その強さは魔界大統領に匹敵するなど様々だ。

この情報を真に受けたエミーゼルは動揺しながら、アグニへと視線を向ける。

するとアグニが小さく首を横に振り、その情報は信じなくて良いと伝えてくれた。

それを見て少しだけ気を取り戻したエミーゼル。

「もういい、雑談に戻ってくれて良いぞ」

「あの、坊ちゃん。」

坊ちゃんは何をしに来たんですか？

「やっぱり……」

「多分想像している通りだ。」

オレ様達は政府に仇なす反逆者の拘束、もしくは排除が目的だ！」

そう自分で言うっておきながら、排除という単語のところでは若干顔が歪んだ事に気付いた者はいないようだ……アグニ以外には、アグニはそんなエミーゼルを見て、『やはり殺す覚悟はないか……』

・・・面倒なことにならないと良いけどな』と心の中で思っていた。今回の任務に極力手を出さないと決めているアグニにとって、この任務は若干面倒くさいアトラクション程度の印象しかないのだ。

「そうですか・・・・・・ところで坊ちゃん。

情報を教えた報酬はないんですかね？」

「報酬？」

「流石に何もなしってワケじゃないですよね？」

そうドスのきいた声でエミーゼルに報酬を求める囚人。

その迫力に少し圧され、一歩後ろに下がってしまったエミーゼルだったが、このままでは舐められると思い、そこで踏みとどまりにらみ返す。

「いいだろう、父上に口利きしてお前達の刑期を少し縮めてやろう。

それでいいか？」

「そりゃあ、ありがてえ！

おい、聞いたか野郎ども！！

この坊ちゃんか刑期短くしてくれるってよ！！

感謝しろよ！！」

「「「ありがとうございやす、坊ちゃん！」「」「

「ぜ、全員か？」

それはちよつと・・・・・・」

「あ？ 何か仰いましたか坊ちゃん？」

「い、いや。 なんでもない。

それじゃあ行くぞ！」

そう言い残して足早にその場を去るエミーゼル。
置いて行かれまいとしてアバドンも早足でその後を続くが、たった一人だけその場に残っていた。
その場に残ったアグニは再び雑談に戻ろうとする悪魔を一体呼び止める。

「なあ、そこのお前」

「あん？ なんだテメエ？

坊ちゃんの部下かなんかか？」

「似たようなもんだ。

で、ちよつと聞きたいんだが、ここのプリニー教育係の名前って知ってるか？」

「名前？ ああ、確かヴァルなんとかってやつだったと思うぜ？」

「もう一人の名前も分かるか？」

「そっちはフェンなんとかってやつだ。

なんでそんなこと聞くんだ？」

「いや、有名な悪魔だったら戦うときに気を付けなきゃならねえからな」

「プリニー教育係になるようなヤツが強い悪魔なワケないだろ？」

心配しすぎだと思っぜ？」

「そうかもしねえな。

じゃあ情報サンキュ、有意義な地獄ライフを過ごしてくれ」

「余計なお世話だ！」

そうしてアグニもようやくエミーゼル達の後を追い始めた。
エミーゼルの後を追っている最中アグニは情報をまとめる。

「（ハゴスから聞いてはいたが、本当にヴァルバトーゼの野郎、プリニー教育係なんかやってたのかよ……）。それにもう一人のプリニー教育係はフェンリツヒか？何でヴァルバトーゼとフェンリツヒが連んでいんのか知らねえけど……コレはあの餓鬼にとって敵すぎるな……どうすっかなあ」

悪化した現状をどうするか思考するアゲニ。

暴君ヴァルバトーゼとその従者フェンリツヒを相手にするには戦力が足りなすぎる。

自分が加わればいい勝負が出来るだろうが、別に敵対する理由もない（戦うこと自体に余り抵抗はないが、全力を出せない相手と戦うのは面白くないと思っっているため、あまりやる気が無いのである）。とりあえず会ってから考えることに決め、いい加減追いつかないと不味いと思い、足を速めていった。

第3話（後書き）

エクストリームバーサス楽しみだなあ

……頑張って師匠を使いこなせるようにしないと！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2014y/>

フォーカード？ いや、革命だ！

2011年11月20日19時47分発行